



TITLE:

コメント1

AUTHOR(S):

粕谷, 元

CITATION:

粕谷, 元. コメント1. CIRAS discussion paper No.80: 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 2: 装いと規範 --現代におけるムスリム女性の選択とその行方 2018, 80: 35-36

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_80_35

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

コメント 1

粕谷 元 日本大学

ウズベキスタンとトルコとの共通性 —— 帯谷報告について

私はトルコの現代史、オスマン帝国からトルコ共和国にかけての歴史を研究しています。まず帯谷さんのご発表ですが、多くの点で私が専門とするトルコと比較可能なお話で、たいへん興味深かったです。従って、トルコの話をするのがコメントに直結すると思いますので、少しトルコの話をしたと思います。

ここにいるみなさんであれば、トルコのスカーフ問題はもうある程度ご存じだと思います。一応確認しておきますと、トルコには、女性の服飾に関して何かを規定する法律はないのです。ただし、政令や規則、あとは細則、通達など、法律の下位レベルになるものがあり、女性のスカーフやイスラーム服なども長い時代にわたって事実上の禁止対象となってきたということです。

じつはアタテュルクの時代には、女性のスカーフやヴェールに対する規制は、アタテュルク後の時代よりもそれほど強くありませんでした。アタテュルクの死後から1950年代にかけて、ようするにケマリズムの「付度」が強まりました。

お手元の資料をご覧くださいればわかるように、トルコのイスラームファッションにはいろいろなバリエーションがありますが、オスマン帝国時代の女性が一般的に身に着けていたチャルシャフについて、まさにウズベキスタンのような根絶キャンペーンが1950年代に展開されました。そのときによく言われたのが、「体を覆いたいのなら、チャルシャフではなくてマントを着けろ。マントのほうがモダンである」ということでした。

それによって今日トルコで見かけるようなイスラーム服の原型になる服装が、1960年代に入って出現します。ただし、そのときに出現したスタイルというのは、それまでのトルコにはなかった形態の覆いで、女性たちがいったいどこからそういうスタイルを取り入れたのかについては、実はよくわかっておらず、もう少し研究が必要です。私はこれを専門にしているわけではないのですが、今回話を聞いて、あら

ためてそのところを調べてみたいと思いました。

1960年代後半から大学のキャンパス内で、今日見られるようなスタイルのイスラーム服を女子学生が身に着け始めたことによって、トルコでいわゆる「トゥルバン問題」が顕在化します。トゥルバンはターバンのトルコ語です。その後の歴史はヴェールをまとう女性にとっては苦難の歴史でした。

1990年代後半から2000年代は、今度は一転して大学キャンパス内におけるイスラーム服解禁の時代となりました。ただし、解禁は大学が個別に行いました。親イスラーム的な政権になって、たとえばヴェールを解禁する大学にはより多くの補助金を出すといった露骨な政策も行われました。大学にとって補助金がいかに大事かはよくわかるでしょう。(笑)

「トゥルバン問題」の顕在化という点では、トルコにはイマーム・ハティーブ学校というものがありますが、そこに1970年代以降女子生徒が入学できるようになったことも大きいです。その時代から一層顕在化するということがあると思います。

ご存じのとおりエルドアン政権になって、発生から40年間続いたトルコの「トゥルバン問題」はようやく収束に向かいました。それに至るまでの過程では、まさに本日の帯谷さんの話にあったように、スカーフを髪の後ろで結ぶような「モダンなスタイル」と当局が認めたスカーフの結び方ならOKということもありました。1980年代の話で、スカーフ着用の「モダンなスタイル」が一時模索されましたが、「モダン」の定義がしっかりしていなくて、その定義が各大学の個別判断に委ねられたので、混乱を招いただけで、結局失敗しました。今日では「そんなことがあったね」という過去の話になっています。先取りとは言いませんが、トルコが経験してきたようなことをウズベキスタンも経験しているようですので、一つの参考にはなると思います。

トルコにおけるニカーブ着用者 —— 後藤報告について

続いて後藤さんの話についてです。ニカーブにつ

いてたいへん興味深いお話を聞かせていただいたのですが、たとえばトルコでは、ニカーブはスカーフ問題に関する議論からはほぼ捨象されていて、ほとんど研究対象になってこなかったと思います。そもそも近年まで、それをフィールドワークすること自体が困難だったということもありますが、その意味で後藤さんのエジプトにおける研究は、たいへん興味深いです。

フィールドワークが困難という理由以外に、なぜトルコでニカーブが研究対象になってこなかったのかというと、少なくとも1930年代以降のトルコでは、ニカーブ着用者はあまりに異端的で少数でした。世俗主義体制にとっては、着用者が桁違いに多い、よりファッショナブルなイスラム服あるいはスカーフのほうが脅威です。したがって、その広がり限定的なニカーブ着用をあまり相手にしてこなかったというところもあったと思います。

後藤さんへの質問です。エジプトなどもそうだと思いますが、ニカーブを選択的にまとう自由を有する社会や国でのニカーブとサラフ主義との関連性を指摘されていましたが、サラフ主義の影響外のニカーブ着用者は、どの程度いるのか。というのも、仮に両者がセットのような関係になっているのであれば、サラフ主義が広がらない限りニカーブ着用者も広がらないという仮説が成り立つことになります。ちなみにトルコでは、ニカーブは、特定のタリーカあるいは特定のジェマートのメンバー以外にほとんど見られないので、その点についてうかがいたいと思います。

ハラール化粧品にみる逆説的な世俗化

——野中報告について

最後に野中さんの発表についてです。「ああ、そうなんだ。おもしろいなあ」と聞かせていただきました。ハラール化粧品をはじめとするイスラム的消費財の地域的特性、インドネシア的特性はあるとは思いますが、一方でグローバル化の時代ですから、たとえばハラール規格に関しても世界共通規格を作ろうという動きになると思うんですね。リーダーシップを取る国があるでしょうし、消費財についても、世界的流行もあれば、主要な発信国や主要な発信都市もあると思います。特にインドネシアはマレーシアと近い関係にありますから、そのあたりの関係があるでしょう。このテーマは、もはやインドネシア研究

の枠組みには収まらない話になっていると思います。

もう一点、逆説的な世俗化と言いますか、ハラール化粧品をはじめとするイスラム的な消費財というのは、ハラール規格というその産業規格を一つひとつクリアしないとなかなか生産、流通できない。そのイスラム的消費財の生産や流通には、異教徒も参入するわけですね。たとえば韓国製の化粧品や、日本人が作るハラール化粧品などです。ハラールの遵守というイスラム教義の実践が、産業基準・産業規格をクリアすることでようやく可能になるわけです。しかし言い換えると、宗教教義であるハラール概念というものが、産業の一分野に組み込まれてしまうという局面があると思います。完全に世俗的な法規の下で行政が定めた各種ガイドラインに従うことで、イスラム教の追求ができるということです。

イスラム・ファッション、ヴェールの中には、「どう見てもこれはもうファッションでしょう」と思うものがあります。トルコのイスラム・ファッションでもそのファッション性の追求が行き着くところまで行くと、「きれいだな」と思う反面、「絶対に見せるためのものでしょう」と、ほくはどうしても思うわけです。これは宗教の世俗化とも言えます。そういった例は人類の歴史に普遍的に見られる現象でもあるので、そうすると、また先ほどの話に戻りますが、もはやインドネシア研究とかイスラム研究という枠組みではもう収まらない、大きな研究対象になっていくだろうと感じました。